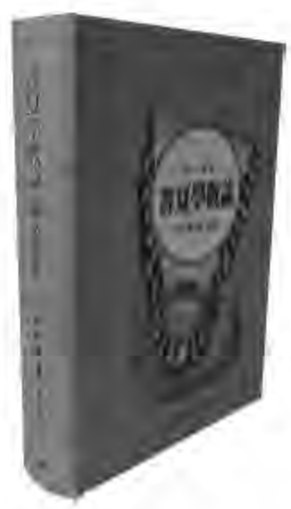
政大原住民族研究中心

學的論說
《賽夏學概論論文選集》評述



「学」についての論説
『サイシャット学概論論文選集』への論評

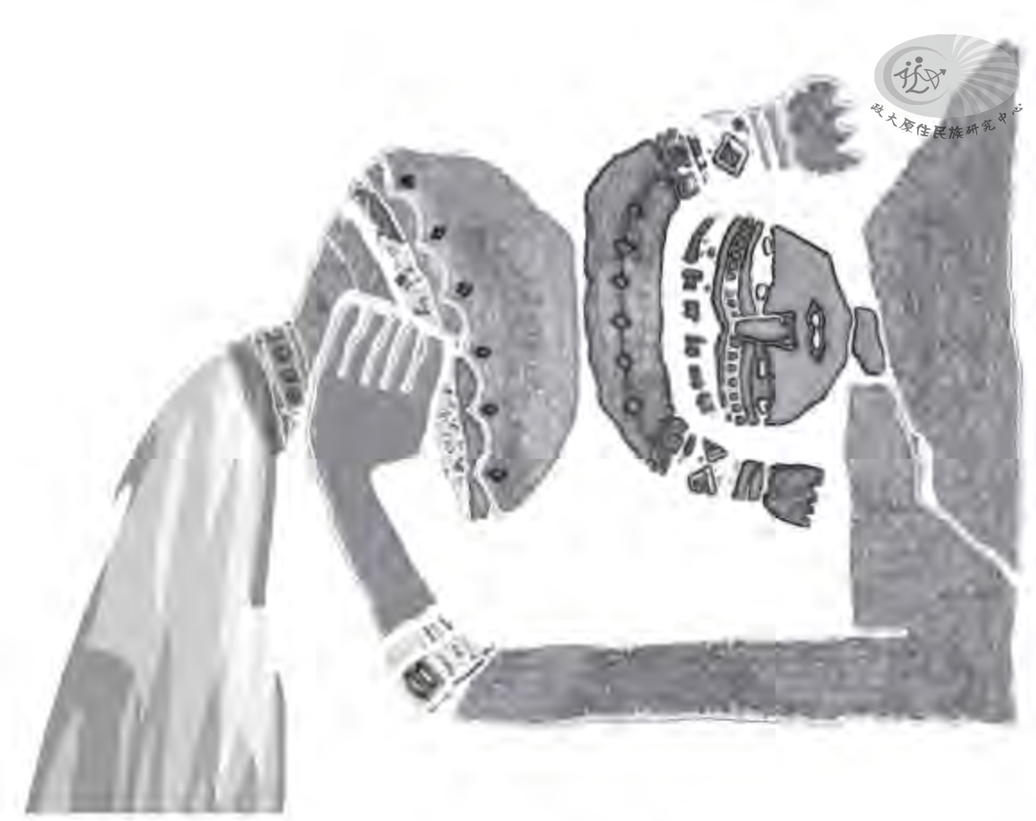
謝世忠　國立台灣大學人類學系教授兼主任
石村明子　翻譯

台灣南島系原住民目前十二族，哪一族得以「顯赫」，背景因素或許多重，不過，學術的目光所在與否，以及學者的涉入深度，應是關鍵理由前矛。賽夏人口少，分佈地不大，又曾長期在族群認定上，時而平埔，時而高山，灰色位置難以論斷，甚至研判其已客家化泰雅化而不知是否尚存。今天，在國立政治大學民族學系主任兼原住民族語教文研究中心主任林修澈教授及其工作團隊努力之下，出版了《賽夏學概論論文選集》乙書，厚達826頁，除了大大凸顯了小族群赫赫活躍事實，更以「學」的用詞，建置了特定知識論述的上昇位階。

譯 台湾のオーストロネシア系原住民は目下十二民族であり、そのうちどの民族が「盛況」を呈しているとされるかは様々な事情によると思われるが、学術的観点の有無や学者の関わり具合がその理由の上位に挙げられるだろう。サイシャットは人口が少なく、分布範囲も狭いうえ、民族認定においては長きに亘り時には平埔、時には高山、と曖昧で判断が難しいうえ、更には、今でもそうかどうかは知らないが、客家化、タイヤル化していると見なされることもある。今日、国立政治大学民族学科長兼原住民族言語教育文化研究センター長の林修澈教授及びその編集チームの努力により、826ページにも亘る『サイシャット学概論論文集』が出版されたが、本書では小規模ながら盛んな民族の様子がくっきりと浮き彫りにされたうえ、更には「学」という語により、特定の知識に関する論述の階位も高められるに至った。

在十二族原住民中，學術研究資料多過賽夏者眾，但就是無人曾創用如「阿美學」、「泰雅學」或「排灣學」等之稱。本書編輯團隊於2004年12月在苗栗南庄所主辦的「賽夏學國際學術研討會」是為開端，再以之為基礎（按本書收錄40文，其中該會議文章有13篇。佔了1/3份量），拓展出大書的完成。本書雖只是「選集」，又以「概論」名之，但在編者心中，應是已盡收了書後467種「賽夏學文獻目錄」中的精華。否則就不可能達到主編所言「以賽夏族為研究對象，體系性描繪出全貌的一門學問」的效果目標。

譯 原住民十二民族において、サイシャットより学術研究の資料が多い民族は多数あるが、「アミ学」や「タイヤル学」、「パイワン学」などの呼称が使われたことはかつて無い。本書の編集チームは2004年12月に苗栗の南庄で行われた「サイシャット学国際学



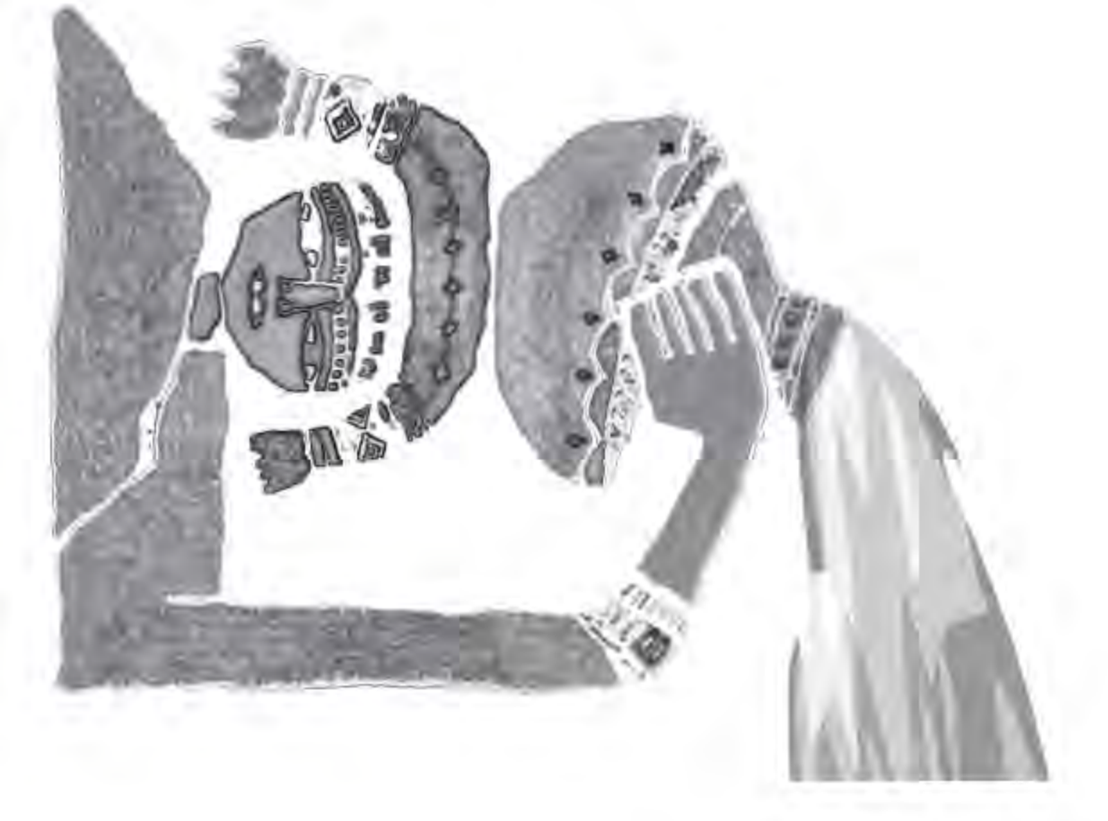
術シンポジウム」をきっかけに、それを土台とし（本書には40の文章が収録されているが、当シンポジウムの13の論文が全体の1/3を占めている）、発展させて本書を完成させた。本書は「論文集」であり「概論」でもあるが、編集者にとっては巻末に収録された「サイシャット学文献リスト」467項目中の要であったに違いない。さもなければ編集長の言うところの「サイシャット族を研究対象とし、その全貌を体系的に描いた学問」という効果的な目標を達成することは出来ないであろう。

編輯同仁心力付出，吾人不能吝於掌聲。的確，在學院、地方政府及族人作家成功合作，本國人外國人交心努力結晶，原漢攜手共同詮釋歷史文化，以及人類學、民族學、歷史學、語言學大團結等事蹟上，本書均是標準的典範。在此一認知前提下，推薦閱讀本書自是理所當然。

譯 並々ならぬ努力を注いだ編集チーム対して、拍手を送らずにはいられない。大学、地方政府、民族作家の協力の成功、自国、他国を問わない人々の努力の結晶、原住民、漢民族のタイアップによる歴史文化の共同解釈、及び人類学、民族学、歴史学、言語学の一致団結などの功績において、本書は間違いなく典型的な手本である。このような認識のもとで、本書を推薦するのは当然のことと言えよう。

誠然，建置新「學」，恐怕不是自己說了算，否則孤零零「學」在那兒，無人對話回應，也是滄涼。本書收文最早一篇為1935年，最新著為2006年。前後71年光景，1960之前6文，1970代掛零，80與90年代各3文和6文，甚餘25文全是2000年之後產物。25文中有超過一半（13文）為2004年會議文章，若再加上本書主編節自2000年專書的四文，二十一世紀「賽夏學」若得以順利建置，政大團隊主筆或主導的17文（佔2000年來25文的2/3）居功厥偉。

譯 確かに、新しい「学」は自ら名乗って成り立つものではないし、それだけでは孤独で誰からの反応も無く、うら寂しい限りである。本書に収録された最古の文章は1935年、最新の文章は2006年のものである。この71年間のうち、1960年以前の文章は6篇、1970年代のものは皆無、80年代と90年代はそれぞれ3篇、6篇であり、残りの25篇は2000年以降の産物である。25篇中半分以上（13篇）は2004年のシンポジウムの文章であり、さらに2000年出版の書籍から抜粋された本書の編集責任者による文章4篇を加え、21世紀の「サイシャット学」を順調に立ち上げることが出来れば、政大チームが執筆または主導した17篇の文章によって、輝かしい業績を達成することになる。



國際上以類似「族」的架構，而形成著名學術範疇者，有如「漢學」和「藏學」等。國內過去有客裔人士倡議「客家學」，雖經極力呼籲，但近幾年數個國立大學分別成立了三院一所客家相關研究單位，卻無一以「客家學」為名者。「學」(-ics, -logy, -try)的確立，必須有明確穩固的方法論，豐沛的概念語言，理論建構的傳統與方向，以及永不歇息之跨時空對話的高昂興致。「客家學」終歸無此，所以難以為繼。

譯 国際的にも「民族」を枠組みとし、著名な学術分野になった例が他にもある。例えば「漢学」（訳注：中国学（Sinology）を指す。）や「チベット学」などである。国内においては過去に客家系の人々が提唱した「客家学」が極力アピールされ、ここ数年間いくつかの国立大学に客家関係の研究機構が3ヶ所設立されたにもかかわらず、「客家学」を名乗るまでには至っていない。「学」（-ics, -logy, -try）の確立は、明確で安定した方法論と、豊かな概念言語、理論構築の伝統と方向、時空を超えた末永い対話を続ける気持ちの昂りが不可欠である。ところが「客家学」は結局それを果たすことが出来ず、継続が難しくなっている。

今政大團隊揭舉「賽夏學」，我們看到了資料、紀錄、圖片、檔案、比較、解釋、考證、追憶等等。但它們是否已然「體系性描繪全貌」？意即，「體系」到底在何處，或者「全貌」真的已出現？「賽夏學論」主導人應清楚先告知讀者。同時，往後該門學問的方法、概念、理論、及對話等學理四大原則，如何得以掌握，以及其他十一族紛紛殷望也為「學」，林教授團隊或許可以為我們解決前者疑惑，再一併建議後者應如何努力爭取而得。

譯 今回の政大チームにより披露された「サイシャット学」において、我々は資料、記録、図、ファイル、比較、解釈、考証、追憶などを眺めてきた。だが、それらは「その全貌を体系的に描いた」かどうか、「体系」はどこに存在するのか、「全貌」は本当に現れたのか、ということを「サイシャット学論」の統率者は先ず読者に知らせるべきである。同時に今後の学問の方法、概念、理論、そして対話の学理四原則をどうすれば把握出来るのかということと、他の十一民族も立て続けに「学」になるのを熱望していることに関して、林教授のチームは前者に対する疑問を解決し、後者に対しては望みを実現させる方法を提案してくれることだろう。